翻　訳

お　巡　り

(短編小説)

アルバート・マルツ著
坂　本　肇　訳

エンツォが両脚を失うまえはさぞ偉丈夫だったにちがいない。身の丈六フィートはあったろうかという恰幅のよい北部イタリア人だったからだ。ぼくが会った時は五十歳くらいだった。ごっついながらもまだハンサムで、黒い髪には白いものが少し混じっていた。いつも車椅子に乗っていて背筋をぴんと伸ばしていたが、たくましい両手は大腿部の先端の切り口に当てられ、黒い瞳が元気そうに光っていた。

かれの経営する食堂はぼくの下宿の近くにあって、よく工場労働者がひいきにしていた。食べ物は安いだけでなく旨かったので、ぼくも毎日のように食べに行った。常連になってから一週間ほどすると、エンツォが車椅子を動かしてぼくのテーブルにやってきて、いきなり「あんたはアメリカ人？それともイギリス人？」と訊いた。

「アメリカ人だけど」

「あんたが観光客とかビジネスマンでないってことははっきりしとるんだがね。うちで食事をするが、ヴィア・ヴィネートの辺りには行かない。毎日、同じ靴に同じ服だ。学生にしては少しふけてみえる。ひょっとすりゃ芸術家か。だが、わしはそうは思わん。あんたがこのローマで何をしとるのか当てようと思うて、わしは頭をひねっとるんだ」

途方にくれたようなかれの顔を見て、ぼくは思わず声にだして笑った。「どうしてそんなこと訊くんですか？」

かれも笑った。「どうしてだか考えるのがわしの性分なんだが、いまはあん

たに訊いとるんだよ」

「午前中は学校の先生ですよ」

「まさか！あんたのイタリア語はわしの五体と同じで、まともじゃないよ」

「私立の学校で英語を教えているんです」

エンツォは、でかい鼻を太い親指ではじくようにさわった。「ああ、そう、、、それにしても実入りが少ないようなら、国へ帰って先生をしたらどうなんで？もっと稼げるんじゃないかな、え？」

「ぼくは一年か二年、このイタリアで暮らしたいと思っているんです」

かれは面白いと思ったようだった。「あんたの年なら女だな。こちらの娘っこはお国の娘よりか情が深い。そうだろ？」

「女の子とここのパスタですね」

「うちのパスタを食えば病気にはならんからな」かれはくすりと笑っていった。「娘っこには気をつけてつきあうことだ。ペニシリンだって恐れをなす娘っこもいるからな」

翌日、エンツォは車椅子でぼくのところにくると、きびしい口調でいった。「ところで、あんたは何をしているのかね？いま、客が何人か店から出ていったが――あんたは客の話に聞き耳を立てていた。わしの目はふし穴じゃない。何を書きつけていたのかね？あんたが外国人でなけりゃ、てっきりサツのまわし者だと思うところだ。だが、それにしてはヘマなやり方じゃないか――大したトウシロだね」

ぼくはまごついた。それでポケットから手帖を出して、かれに見せた。「ぼくはもの書きだからノートをとっているんです。ひとの話ぶりや――話の内容をね」

数分間、エンツォは手帖を熱心に注意深く調べた。一度は低い声でこういった「あんたのイタリア語、しゃべるよりか書くほうがもっとひどいな。書き取りの練習をしなくちゃ」しかし、手帖をぼくに戻した時はすっかり気を許したみたいだった。「それだもんで、いつも午後はタイプライターを叩いてい

なさるわけなんだな？」

「どうして知ってるの？」

「うちで皿洗いをしている娘が、あんたの下宿のおかみさんの身内なもんでね。そういうことだったのか、、、先生をしながら何かものを書いている、え？ブンヤさんかね？」

「いや、違いますよ」

かれはぼくに対して好奇心がつのったようだった。「本でも書いていなさるのかね？」

「まだ短い小説しか書いていません」

「ほほう、短い小説をね。いや面白い」

それからエンツォはぼくのテーブルにちょくちょく来るようになった。アメリカでの暮らしについて実にいろんなことを訊いたが、ぼくがものを書いているというので、どうやらぼくに興味をもっているようだった。かれが新聞や大衆雑誌の他にはこれといって読んだこともないような男なので、どうもこれには面食らった。――しかも、かれが訊くのは半ば専門的なことで、たとえば、作家はどのようにしてアイデアを得るのか、実際の出来事は物語のなかでどのくらい使われているのか、書くのはやさしいかむずかしいか、また、それはなぜかというようなことだった。まるでかれが小説の筋を考えてでもいるかのように、毎週きまっていくつかの新しい質問をした。どうしてそんなに関心を持つのかとぼくが逆に訊くと、かれはただ肩をすくめて笑うだけだった。

学校の年度が終って、ぼくがあと二、三日したらローマを立つとエンツォにいうと、かれは遅い時刻の夕食にぼくを招待した。夜は他にすることがあったが、かれは妙にしつこくて、けっきょく、ぼくも承知した。夜の十二時ころになり、店内はぼくたちだけになった。三本目のワインを飲もうとした時（エンツォはぼくが一杯飲む間に二杯は飲んでいた）、かれが少しはにかむようにこういった。

「あんたに話があるんだがな。あんたはもの書きだろ。わしが両脚をなくし

たのには、わけがあってな。それはどういえばいいか、、、」と口ごもりながら、ぴったりした言葉を探そうとした。「そう、心意気とでもいうかな。わしがいいたいのは、、、人にはだれでも欲がある。エゴイストだ。だれでもそうだ。生まれたときからそんなもんだ。だが、そうだとしても、、、人は自分のことだけを考えてりゃ大変な代価を払わにゃならん。これじゃつじつまが合わんが、、、人はどうやって生きていったらいいのか？、、、どうしてそんなことがはなから人には見えないんだろうか？」わけが判らんというような顔をしてエンツォはまたいいよどんだ。「この話は、、、わしが大物だなんていうつもりはないが――ただ他の者では――だが、そういうわけで、わしが、、、わしがいいたいこと、わかるだろ？」

「ええ、もちろん」とぼくはいった。

「よかった。それでわしの提案というのはこうだ。あんたにわしの身の上話をする――それをあんたが書く。みなに読めるようにな。どうだい？」

「ぼくにできれば、やってみましょう」

エンツォは喜びを顔にあらわしてほほ笑んだ。控えめな微笑だった。かれのなかで緊張が高まっていくのがわかった。かれはボトルに手をのばして二人のグラスにワインを注いだ。それからささやくようにいった。

「こんなことをいうにはワインの助けがいる、、、そもそも始りは、ええと、、、そう、わしの家はすごい貧乏でな、親父はいなかった。第一次大戦で殺されたんだ。わしが十六のとき、おふくろがわしを食っていけるようにと神学校にやった。そうすりゃ家で腹をすかしている者が一人いなくなるわけだ。わしは小さい時から大飯食らいだった。それに聖母マリア様に対する信仰心も厚かった。だが、神父になるってのはどうも性に合わなかったんだ。だもんで十八の時にそこを逃げだした。それから三年間というもの、何をして食ったか自分でも判らんほどだ――職にあぶれた者が何百万とおった――わしは腹がぺこぺこになったあまり、塩もかけないで悪魔でも食うことができただろうよ。人はどん底に落ちこんだら、立派なことなんか目にも入らなくなるもんだ。わしは心に決

めたね。『ようし、世間がそういうもんなら、だれだって食うか食われろだ』ってね」

エンツォはワインを飲みほすと車椅子をぼくのほうへ近づけた。「でも、二十一になったとき運が変わった――たまたまお巡りになれたんだ。ここから北の山国でミラノから何時間とはかからん地方の州都だがな。わしはお巡りにあこがれてたんだ――あの制服、ちゃんとした定職、それに娘っこがわしを見る目つきが違ってくるだろ。だけど、何といっても袖の下がたんまり入るのが魅力だった。どんな具合だかいわんでもわかるだろ――ぽん引き、たかり、いかがわしい商売人――連中はみんな袖の下を使う。警察のお偉いさんになればなるほど、実入りも多い。それで、わしも精一杯に稼いでお偉いさんになる順番を待っとった」

「それはもちろん、ムッソリーニの時代のことなんですね」

「そのとおり」エンツォはふざけるようにファシストの敬礼をした。「わしのようなヒラのお巡りはだれが権力の座についていようと構やせん。貰う給料に変りはないからな。わが身かわいさに仕事しとるんだ」グラスにワインを注ぐと、ぐっと飲み干してまた注いだ。「女に対するわしの態度というのはな、ええかっこなぞせんで、ありのまま話すつもりじゃ。女なんて男を楽しませるためにいるんだ。それがわしの口ぐせだった。月がきれいだとか、ロマンチックなたわごとなんかどうでもええ。そう、わしがデカをしていた時のことだが、別嬪の百姓女が統制を破ったのを捕まえたことがあってな、戦時中の闇市の卵売りみたいなもんだ。その女を豚箱へやろうと思ったかって？よほどのことがない限り、そんなことはないな。何のトクにもならんだろ。まず卵の入ったバスケットを証拠品として没収したんだな――それでわしの分のオムレツがたくさん作れるわけだ。それから女の肩に腕を回してこういうんだ。『えっ、おい別嬪さん、豚箱に入りたいわけじゃないんだろ？』すると、たいてい女たちはおびえてしまって、わしに悪態を少々つくのが関の山だ。あとはなにもできやしない。観念さえしてくれりゃ、そんな悪態など蛙の面に小便というわけだ、、、

そうなんじゃ、わしはそういう人間だった。わしは何の不満もなかった。そうやって弱肉強食のジャングルで生きていたから、、、だが、わしをてんでだめにした年のことを話さにゃならん。一九四三年のことだった。戦争の最中で連合軍がシチリアを占領した直後のことだが、そのあと国内がどうなったか、あんた覚えていなさるかね？」

「よくは知りませんけど」とぼくはいった。

「それは凄い混乱状態になったんだ。まずムッソリーニが政権から放り出された。それからアメリカ軍とイギリス軍がサレルノの南に侵攻してくると、新政権はたちまち降伏した。しかしイタリアにはドイツの軍隊がいた。奴らは力ずくで接収を始め、わしらの軍隊から武器を取りあげると全土を占領しちまった。それからすぐに一種の内戦が始まった。ドイツ野郎をまだ支持しているファシストの勢力があり、いたるところでパルチザンのグループが蜂起して連合軍と協力して戦った。

「わしはパルチザンの連中に舌を巻いたが、その一方で地獄へ落ちやがれと思ったもんだ。わしの見るところでは、ドイツ野郎が打ち負かされることがあっても、それは連合軍の力であって、他のだれのおかげでもない。パルチザンに何ができるだろうか？何もできやしないだろう。わしにはそう思われたんだ――三、四人の兵士を殺し、補給基地を襲う――ノミが虎に咬みつくようなもんだ。しかも連中はわしらにとんでもない迷惑をかけたんだから。とりわけこのわしにだよ。いいかね、わしは神学校におったおかげでドイツ語を少しばかり知っておった。だもんで、ゲシュタポから通訳の仕事をさせられていた。

「わしがゲシュタポを忌み嫌ったのは、人がチフス菌を忌み嫌うようなもんだった。しかし、当時のわしにはこれだけはしなくちゃならんと思われた。すなわち、じっと待つ。友好的ポーズをとる。奴らの信用をかちとる。この三つだ。とはいうても、ノミがぴょんと跳びあがるたんびに虎は尻尾を振りまわす――わしは冷や汗が出た。ゲシュタポの連中はイタリア人をだれ一人として信用していなかった――それに奴らの本部の地下室でどんなことが行われているか、わしは知っ

ておった。畜生め、奴らがいまにもわしに疑惑の目を向けるのではないかと、わしは死ぬほどびくびくしてたんだ」

エンツォはグラスを空けて、ちょっとの間、黙って考えこむように座っていた。じっと見ていると、かれのいかつい顔が柔和になったようだった。それから彼は低い声で話しだしたが、その抑えた語調には悲しみと昔をなつかしむ響きがあった。

「わしは大広間に面した小さなホテルに住んでいた。持ち主には娘が一人いた。グラチアって名前だった。わしはその子が小さい時から成長するのをずっと見てきた。ぴちぴちした子で、いつも長い髪をなびかせながら、走ったり笑ったりしていた。とつぜんそれが十六になった。女になっていた。わしはものにしたかった。男ならだれでもそう思ったろう。あんたにもその子を見せてやりたかったな――海のように深く青い眼――腰まで垂れた小麦色の髪――きれいな顔は生き生きとして見る者の心臓をとろかすような――おまけにそのふくよかな体つきを見たら、男は抱きしめたくてうずうずしたに違いない」

「わしは三十三で十七も年上だったが、そんな年の差なんか、男と女がお互いに恋の火花を散らせば何でもない。グラチアもわしにずいぶん好意をもっていた。それで、だれよりも先にかの女を何とかして手に入れようとわしは昼も夜も心も砕いていただろう。もしもある一人の人間――グラチアの親父さえいなかったらの話だが。親父というのは、別にわしの親しい友人というわけではなかった。だが、かつてわしの命を助けてくれたことがあった。わしにとっては、それは男が男に対して報いねばならない唯一の恩義とでもいうものだった。

「そんなしがらみがあったもんで、娘のグラチアにわるさをするなど、わしには思いもよらぬことだった。グラチアはグラチアの思いのままにしておかねばならんかった。そういうわけで、あれがホテルのバーで手伝いをしたり何か仕事をしていると、わしは時間を作って辺りをうろうろとした。おふくろが近くにいないのを見すますと、グラチアにお世辞をいったり、ちょっとからかったりした、、、男が生娘に手を出すやり方はたいてい似たようなもんだ。

かの女の存在がわしの心のなかでどんなに大きいか、わしもそのときはよく判っとらんかった。わしはただ、あれに他のだれよりもわしのことを考えてもらいたかった。むろんじゃが、町にいるドイツ兵は非番になると、一人残らずそのホテルのバーにやってきた。だが、かれらに対してグラチアは氷のようだったな。まだ小娘だったが男を見る目があった。いつも髪のなかに三インチはあるピンを刺していて、『あたいを手ごめにしようとする男なんか、このピンで目を潰してやる！』ってわしに話したことがあった。」

ボトルが空になった。エンツォは車椅子を回してカウンターの後ろからもう一本とった。戻ってくると新しいボトルの栓を開け、自分のグラスに注いだ。ぼくがさっきから飲むのをやめているのにも気づいていないようだった。

「かの女の親父のことで困ったことが起きてな」と、エンツォは苦渋の色をかすかに浮かべて話を続けた。「親父がミラノへ出かけたまんま、一週間たっても戻ってこなかった。ある朝、わしはグラチアに『親父さん、いつ帰るんかね？』と訊いた。かの女はロビーのフロアを掃除していたが、手を休めて周囲を見まわした――辺りにはフロント係の男しかいなかった。それにその男は耳がずいぶん遠かった――すると、かの女は改まったような表情を浮かべてわしのそばに歩みよってきた。

『ゆうべ聞いたんだけど』と小声で言って、『あんたが来るのをずっと待ってたのよ。パパは戻ってこないって』

『どうしたんだ？』

『伝言があったわ。パパったら、留守の間はあんたにあたいの番をしてくれって』

『親父さん、どこへ行ったんだ？』

『山んなかへ行ったわ。ガリバルディのパルチザンに入ったのよ』

『なんてばかなことを！首ねっこひしいでやるぞ！』

『あんたって、そんなふうに思っているの？』かの女はさも失望したような目でわしに訊いた。

『だって、そうだろ？　お前の親父は低能だ。犬死するに決っとる』

『そんな場合にも、あんたは助けてくれないの？』

『助けるって、だれをだ？』

『あんたがゲシュタポの本部で耳にしたことを知らせてくれるとありがたいんだが、とパパが言ったわ』

『お前の親父の頭にゃ、脳味噌の代わりにウナギの天ぷらでも入っとるんだろ。まず第一に、わしの耳には何も入らん。奴らはわしなんか信用しとらんからな。第二に、たとえわしが何か聞いたとして、お前にそれを言ったら、いったいどうなる？お前は親父さんに伝える――親父さんは英雄気どりの仲間に知らせる――そうして、まもなく仲間のだれかがとっ捕まる。そして残らず吐いちまう。そうなりゃ、このわしはどこにいる？首に縄をかけられ、足は地面からぶらりんこだ！』

『まあっ、よっくわかったわ。臆病なのね』とかの女がわしにいった。

『ジャリのくせして判りもせん言葉を使うな』

『溺れかけたあんたをあたいのパパが助けてやったこと、忘れたの！』

『忘れるもんか！おやじさんはわしにお前の番をしろってことだな。がってんだ。お前が亭主からお守りしてもらいたけりゃ、わしが亭主になってやってもいい。だが、わしはガリバルディなんかに関わるのはまっぴらご免だね』

すると、まるでわしが塵芥（ちりあくた）ででもあるかのように、かの女はわしの顔を見てさげすんだ口調でいった。『まあっ、いいわよ。あたいの父さんのために、おむこさんになってくれるというのね。ありがとう。よっく覚えておくわ。ゲシュタポの太鼓持ちと結婚したくなったら、あたい口笛でも吹くわ』とね」

エンツォは言葉を切ってグラスを空けた。そしてまたワインを注いで半分ほど飲んだ。それからしかめっ面をしてこういった。「そんな言葉はどこのだれがいおうと、以前のわしなら、馬の耳に念仏だった。石が当りゃ痛いが、言葉は当たっても痛くない。だが、グラチアからゲシュタポの太鼓持ち呼ばわりされ

ると、わしはあいつの背中を濡れたロープでひっぱたいてやりたい気がした。とはいうても、あいつからそんなふうにいわれたからじゃなかった。それよりか、あいつの目の色だった。グラチアからそんなふうに見られて、わしの男は傷ついた。われながら不思議だった。いったい、グラチアに結婚してもよいなどと、どうしていってしまったのか、ありとあらゆる聖徒の名にかけても判らん。わしはそんなこというつもりはなかった、、、喉から勝手にとび出しやがったんだ。これまで結婚しようなんてわしから女にいったことはなかったんだ、、、自分でも妙な感じがした。

「うん、次の週になってグラチアは用事がある時以外はずっとわしに口をきかなかった。まるでわしが赤の他人か、ドイツ野郎の片われででもあるかのようだった。しかし、その時ちょっとした事が起きた。ガリバルディのゲリラ活動が活発になって、ナチス親衛隊の大佐を路上で待ち伏せて捕虜にしたんだ。ドイツ軍は情報提供者に多額の賞金を与えるというポスターを貼った。わしは独り言をいった。『ははーん、奴らを見つけりゃ金がたんまりか』それから町の駐屯部隊に軍用犬つきのパトロール隊が配属されたので、わしはまたもや『ははーん』と思った。

「山狩りが開始されようとしていることは明らかだった。そのときたまたまわしは流感にかかった。脚の関節が痛むもんで、わしは部屋の窓ぎわの肘掛け椅子に何日もの間、座ってラジオを聞いたり外をぼんやり眺めたりしていた。

「ある晩のこと、日が落ちてすぐじゃったが、一人の男が自転車に乗って広場の向こう側のゲシュタポの本部へやって来た。雨がひどく降っていて、男はコートの襟に深ぶかと顔を隠していたが、戸口の明かりで男がだれかすぐさま判った――ねこ背の行商人ジアンフランコだった。奴さんは、町でいろんな半端物――針や糸や調理用の鍋やポット――を買い集めては自転車に乗って山へ行き、百姓や羊飼いに売りつけていたんだ。わしは何年も前に奴さんの姪と火遊びをしたことがあったもんで、奴さんをよく知っておった。

「警備の兵士が奴さんを案内するのを見てわしは思い出した。奴さんはずう

っとムッソリーニの崇拝者で、黒シャツを着たファシストが行進している時には、きまってこれ見よがしに後にくっついて行進したものだった。そこでわしは独り言をいった。『おい、ジアンフランコ、臭い金じゃないのか？』ってね。

「二十分して奴さん出てきた。用心深く辺りを見まわすと、自転車に乗ってこちらのホテルへやってきた。奴さんが中へ入るとすぐに、わしは脚の関節が痛むのも忘れて階下に下りた。案の定、奴さんはバーにいる。中はドイツ兵でいっぱいなので、わしは外から様子をうかがった。ジアンフランコは立て続けに三杯飲んだ。奴さんが勘定を払っている時にわしはロビーに出た。そこで待っていると、奴さんが出てきたのであとを見張った。奴さんは自転車で山のほうへ向った。それで、わしは腰をおろしてようく考えてみたんじゃ。

「何が起こるかは火を見るより明らかだった。わしが思い悩んだのは、グラチアにこっそり耳打ちしてやったほうがいいだろうかということだけだった。知らせてやればあいつもずんと打ち解けてくれるだろう――だが、後難が絶対に振りかからんようにせにゃならん。その恐れはないようだった。そこでわしは決断した。

「グラチアはバーで兵隊たちに酒を注いでやっている。イタリア語がわかる兵隊がおらんとも限らん。わしはかの女の肩を叩いて次のようにいった。『ミラノから電話だよ。親父さんのようだが』ロビーに出ると、ちょっとあとからかの女が小走りに出て来た。そこで『電話なんか、かかっとらん。だが、大事が起こっとるんで内緒に話をせにゃならん』とわしがいった。グラチアは疑わしそうだったが、ホールを通ってかの女の部屋へわしを連れていった。わしがドアを閉めると、グラチアの奴、『鍵をかけないでね』とぬかしやがった。

『聖処女ぶることはないだろ。わしを何だと思っているんだ！』と、わしは怒鳴りつけんばかりに大声を出した。かの女にそんな口のきき方をされて、わしは頭に来たのだ。『あのジアンフランコの豚野郎は何を飲んでたんだ？』

『グラッパよ。どうしてそんなこと訊くの？』

『前にもバーに来たことがあるのか？』

『あんた、何をするつもりなの？』とかの女はいやに冷淡に訊きかえした。『あたいを警察のいぬにでもするつもりなの？』

『お前の親父さんに命を助けてもらったこと、忘れとりゃせん。ひょっとすりゃ、こんどはわしが親父さんの命を助ける番だ。あの低能野郎のな。わしの訊くことに答えるんだ』

「するとグラチアは、はっとおびえたように大きな目でわしをまじまじと見た。『ジアンフランコは時たま来るけど、しょっちゅうというわけじゃないわ』

『これまでにやって来て――奴はグラッパを飲んでいたのか？』

「かの女はちょっと考えて、『そんなことないわ。普通のワインよ。それもきまって小さなグラスに一杯きりね』

『それじゃ、今夜は奴さんとしちゃ、たいそう張り込んだわけだな、そうだろ？』

『そうね』

『奴が勘定払う時に、大金を持ってるのに気づかなかったか？』

『いいえ』といって、かの女はわしの腕に手をかけた。『ねぇ、エンツォ、そんなことが、あたいのパパとどんな関係があるの？』

『ジアンフランコのあん畜生ほど、山のことをよく知っている奴はいないんだぞ。奴は、自分の金でグラッパを飲むすぐ前に、ゲシュタポの本部にいたんだ』

「グラチアは『聖母マリア様』といったかと思うと震えはじめた。『それじゃ、あんたはどう思うの？』

『わしの見当じゃ、奴はたれこみ料の第一発をもらったんだ。わしの見当が当たっとりゃ、ドイツ軍はぐずぐずしてはおらんぞ。夜のうちに兵を出して、ものが見えるくらい明るくなりゃ、すぐにも襲いかかるんじゃないか』

かの女は『キリスト様にマリア様』というや、ジアンフランコを呪った。『もしもあたいがあいつの薄汚ない心臓にナイフを突き刺さなかったら、どうかあたいの体を四つに引き裂いて下さい』

『今はそんなこと構うな。危険を知らせる方法はないのか？』

『あるわよ』かの女の顔は紙のように青ざめていた。

『仲間がずらかる時間はあるんだな？』

『あると思うわ』

『ようし、いいか』とわしはいった。『わしはこれにゃ一切関わりなしだ！だれがお前に教えたか、だれにもいうなよ』

『もちろんよ、エンツォ。わかってるわ』

「わしがドアを開けていると、かの女はわしの頬にキスをした。そのキスがわしにとってどんな意味をもつか、その時にはとんと判らんかった。わしが思ったのは次のことだけじゃった。『こいつは占め子のうさぎだ。グラチアのご機嫌をうまくとったからな。これであれの親父にも借りは返したし、あとの災いもないとくらぁ』わしは部屋に戻ると暗いなかに座って広場をじっと見た。

「雨は止んでいた。しんとして動くものはない。十分後にドアをノックする音がした。グラチアだった。かの女は震えていた。『みんなだめだわ。連絡係の二人に電話したの。でも、留守なの』とかの女はいった。それからわしの腹を小突いて『あたいが行くわ。仲間の居るとこわかってるから。エンツォ、拳銃を貸してくれない？』

「その瞬間、わしの目には災いの前兆がありありと見えた。グラチアがとっ捕まり、ゲシュタポにわしがしたことを知られっちまう。だが、どうやってあの子を止めだてできようか？わしはグラチアのことなんか考えとらんかった。ただわが身の安全を考えとった。

『拳銃貸してくれない？』とかの女はまたいった。

『馬鹿をいえ』とわたしは怒鳴りつけた。『わしは一丁しか持っとらん。それに番号が登録されとるんだぞ。第一、お前は拳銃の撃ち方も知らんだろう』

『だって、お願い』とかの女はなおも頼んだ。『ドイツ兵があたいより先に着くかも知れないでしょ。だけど、まだ暗けりゃ警報代わりに一発撃てるわ』

『拳銃を渡すわけにはいかん！』

「グラチアは出て行こうとした。わしはその腕をつかんだ。そしていった。『おい、グラチア。もしかすると手を貸してやれるぞ。そこは遠いのか？』

「ちょっとの間、かの女はわしをじっと見つめた。その時の表情が今でも目に見える、、、うまく言えないが、かすかな望みを目に浮かべていた。わしには判った、あれの考えとることが。わしに行ってほしかったんだ。『まっすぐ行けば三十キロくらいだわ。でもパトロールを避けるためには、ずいぶんと回り道しなけりゃならないでしょ』かの女はそういいながら、なおもわしの顔を見ている。その目が正直にあれの気持を語っていた。しかしドアを閉めるようにわしは心を閉ざした。恐ろしくて行けなかった。わしはガリバルディを呪った。かの女を行かせないですむ方法をひたすら考えた。

「わしはいった。『気違いざただ。もう八時じゃないか。うまく間に合うためには、遅くとも明け方の四時に着かなくてはならん。二十五キロ、いや三十キロの道のりを八時間で行けるわけがない――暗いなかを畑を横切り、垣根をよじ登り、もしかすりゃ身も隠さねばならん』

『走ってくわよ』

『懐中電灯も持たずにか？』

『必要ならば小さいのを使うわ。あたいがやらなきゃどうするの？ほかに何か方法があって？』といってかの女は一瞬、待った。それから、わしが何もいわなかったので腕を静かに引くと、戸口のほうに歩きだした。わしは気分が悪くなった。恐しさのあまり、つぎのように怒鳴るのがやっとだった。『それじゃ、黒っぽい服装をするんだ、この馬鹿たれ。顔には木炭をなすりつけとけ。犬を追っ払うために棒切れがいるぞ。へたばらんように食糧も持ってけよ――砂糖、チーズ、パン、とくに砂糖だ』

「かの女は何もいわなかった。ただ石のような顔でわしを見ると、そのまま出ていった」

ここでちょっと、エンツォは話を中断した。そして充血した目でぼくの顔をまじまじと見た。両手で車椅子の肘掛けをつかんで、体を前に乗りだすように

している。

「わしはそうやってグラチアを行かせた。十六歳の小娘をだ。かの女のことは念頭になかった。わしはただわが身におよぶ災いを恐れていた。あいつが出ていくとすぐ、わしは腰をおろし、わが身を安全にする手だてを思案した。実際に安全な手だてはただ一つ、逃げることだった。わしは証明書を持ってるんで、夜間の取り締まりを心配することはない。夜でも移動することができる。で、だれが見つからぬように匿ってくれるだろうか？お巡りをしてきた経験から、何か月も潜伏しているにはきわめて有利な条件がいることが判っている――すなわち絶好の隠れ家と身の危険も恐れない知りあい、それにしばしば隣人の協力も必要だ。ところが、そんな奴はだれも思い当たらない。町から町へ転々とするのもうまくない――バスとか鉄道の駅とか奴らが書類をいつもチェックしているので、とっ捕まる危険が大ありだ。

あれこれ思案するうちに飛び切り妙案らしきものがひょいと頭に浮かんだ。スイスとの国境はここからほんの六十キロしか離れていない。自転車で行けば簡単だ。身分と通訳の証明書さえあれば、国境の警備隊のところへ突っ切れるだろう。そこで奴らにいえばよい。国外逃亡の恐れがある地下組織の親玉を追跡しているんだと。奴らとのやりとりで警備の手薄なところが判るはずだ。これは太鼓判を押してもいい――そうしてわしは無事に国境を越えることができる。夜が明ける前にスイスへ入っているだろう」

エンツォは物柔らかに皮肉っぽい笑いを浮かべて、妙な仕ぐさをした。手のひらで脚の切り口を何度か軽く叩いた。「そうなんで」といってまた話しはじめた。「わしは手だてを思案した。すると気が大きくなって呼吸もずんと楽になった――その時になってわしはグラチアのことを考えはじめたんじゃ。あの小娘が夜っぴいて駆けていく姿を頭に思い描いた。ゲシュタポに捕まらないチャンスは百に一つしかない。と、脳天をハンマーで殴られたように、ゲシュタポの地下室で拷問されているグラチアのようすがわしの脳裏に浮かんだ。汗がどっと出てきた。胃袋がむかついてきて吐きたくなった。

「早く逃げ出せとわしは何度となく自分にいいきかせたが、足は地面にくっついて、いっかな離れない。代わりに行ってやろうとわしがいうのを、今か今かと心待ちにしながらこちらを見ていたグラチアの眼ざしがわしの瞼に映っている。警官のわしなら自転車で行けるだろうと、かの女は知っていたのだ。わしでも、もちろん危険はある。だが、かの女の場合に比べると、その危険は百分の一ではないか。どうしてわしは拒んでしまったのか？わしは自分に悪態をつきはじめた。鏡をのぞいてつばを吐きかけると、これから九十九年の間、目は盲い、ひもじい思いをしながらお前は生きていくがいいと、鏡に映る自分の姿に言葉を吐きかけた。

「生まれて初めて、わが身よりも何ぼも大事なものがわしにはできたのだ。そう、わしはグラチアの無事を祈った――おお、何事もありませんように。あの娘をわしのものにしたいということではない。あいつの身の上に事なかれとただ思ったのだ。逃げ出した方がよいと何度も自分にいっては見たものの、わしは中風病みのように座ったきりで夜を明かした。

「案の定、朝がたの四時にドイツ軍が山の方面に移動していった――オートバイ、装甲車、歩兵が乗ったトラック。六時三十分、将校車が戻ってきてゲシュタポの本部わきの囲いに入った。運転手の姿だけが見えた。それから、七時十五分、このわしに電話がかかった――病気なんかにお構いなく、いつでも奴らは本部にすぐ来いと呼びつけるのだ」

エンツォの血走った目がレストラン内の何もない中空の闇をにらんでいた。もう飲んではいなかった。両手を握りあわせて指を動かしていた。「わしは本当に気分が悪かった」とかれは、つぶやくようにいった。「だが、流感のせいじゃなかった。グラチアは捕まったのだろうか？それとも？、、、広場を横切りながら、向こう側に行きたくなかった。膝から力が抜けてこめかみが締めつけられるように痛かった。もう少しで大きなうめき声をあげるところだった」

しばらくエンツォは黙っていたが、物思いにふけろうとするのを振り切ってまた話しだした。痛々しい話しぶりだった。「わしは署長のブラントのもと

に招き入れられた。かれはゲシュタポに入る前はわしと同じように警官だったが、ヒラとは違ってどこかの町で刑事部長をしていた。年の頃は六十歳くらいだった。わしなんかよりずっとシャープな男で、みかげ石みたいな顔をして何を考えてるのか自分の感情を顔に出さない、そういうタイプの人間だった。わしは憎んでいた。そして恐れてもいた。

「ブラントはわしを見るなり、具合はどうかと訊いた。わしの体を心配している顔なんてもんじゃない。足が少しふらつきますと答えたら、かれは『今朝がた軍隊が出動する物音を聞いたか？』と尋ねてきた。『はい、署長閣下、それで目が覚めました』とわしは答えた。

『実は奇襲部隊だったんだ』とかれはいい、『パルチザンのアジトについて情報が入ってな――山の洞窟だ』そこで言葉を切ってわしにじっと目を向けている。わしは恐ろしくて体が自分のもんではないような気がした。あまりにおびえていたので、とてつもない考えにとりつかれた――どこかに塩はないだろうか。もし塩があれば、百姓が幸運を祈って新築の家で撒くように、縁起直しに床一面にばら撒くんだが、と。全くおかしな考えだった。そうこうするうちにブラントが話をつづけた。『洞窟への道は昨夜、三人の友好的イタリア人によって監視されていた、、、』

『ジアンフランコの野郎と二人の弟だな』とわしは心の中で思った。

『三人は、小川の岸に沿って三十メートルずつ離れて位置についていた。洞窟は川の向こう側、二百メートルほどのところにあった。わが方の軍隊はその場所に五時に到着する予定だった。ところが、軍隊が着く二十分前にパルチザンは警報を受けて逃走した』」

エンツォは、ほとんどささやきかけるように話した。「これを聞いて、わしは小娘グラチアの仕業にたまげてしまった。と思うまもなく、わしはブラントから喉元にタオルを無理に巻きつけられて締め殺されているような気がした。『警報を出したのは女の子だ。君んとこのホテルのバーにいる女の子だよ』とかれが言ったからだ。

「わしは必死になって驚いたふりをした。『グラチアがですか？選りに選ってあの子がだなんて、わたしには考えられもしません』

『ほう、どうしてだね？』

『あれは小娘です。どうして巻きこまれたんでありますか？』

『そうだね、どうしてだろう？』とブラントは皮肉たっぷりに訊き返した。『可愛いおぼこ娘だね。敬虔なカトリックでもある。ぼくが保証するよ。その子は川のそばに来て、見張りの男たちがいるのに驚いたんだね――パン切りナイフを引き抜けないほど深く一人の男の胸板に突き刺した。残る二人が駆け寄ると娘は川の中に飛びこんだ――パルチザンの奴らにドイツの兵隊が来ると、わめきながら知らせたんだ。黙らされる前に何度も何度も大声でわめいていた、、、どうだね、エンツォ君？』

『はい、何でしょうか？署長閣下』

『このことからどういう結論が引き出せるかね？』

少しでも時間を稼ごうと、わしはレインコートを脱いだ。それからいった。『パルチザンの仲間が町にいると思われます、、、それに情報網も行き届いているようであります』

『ぼくもそう思う』

『しかし、女をそのような使いに出すというのは変ではありませんか？』

『娘はそこに行った。察するに奴らも承知の上だったんじゃないかな。いずれにせよ、娘は鍵になる。ぼくがすでに尋問してみたが、大した愛国者でな。君も知ってのとおり、ぼくのイタリア語はあまり上手くない。娘はぼくのいうことを完全には理解しなかったようだ。かの女には目下、特別に目をかけているところだがね。ここに戻ってきたら、君から話してくれ。娘には思い違いのないよう、立場をわきまえさせねばならん。グループの名前を明かせば、またバーの仕事をするのもよかろう。あくまで白を切るようなら、娘はボロボロになるまで釈放するわけにはいかん』」

ブラントがエンツォにそういってから十六年になるが、エンツォは今、ぼく

にその言葉を語って聞かせながら泣きそうな口調になった。エンツォは「娘はボロボロになるまで」という言葉をくりかえした。「この言葉でわしがどうなったか、、、どんなに惨めになったか、どんなにやましい気がしたか、わかってはもらえまい。グラチアがいまどんな仕打ちを受けているのか、わしは訊きださねばならないと思った。危険な質問だった。わしは、地下室でどういうことが行われているのか知ってはいけなかった。また「特別に目をかける」ことがどういう意味なのかも訊いてはいけなかった。

「わしの舌はだらんとソーセージのようになって、動かすのもやっとだった。わしはしどろもどろになった。『署長閣下、、、わたしはその娘をよく知っておりますので、どのように扱ったらよいか判ります、、、しかしであります、まず最初に、、、もしお尋ねしてよろしければ、、、それが、わたしのいうことに関係すると思いますが、、、娘が受けているという、、、目をかけるということでありますが、、、』

「ブラントは冷たい目でわしをじいっと見ていた。『君、どうかしたのかね？汗をかいているじゃないか。声も震えているが、、、』

『まだ風邪がよくなっていないもんですから』とわしは努めて何気なさそうに答えた。『大したことないです』

「すると、かれはじいっと前よりも長いこと、わしの顔に視線をあてた。そしていった。『娘には今後、われわれのために働いてもらいたい。それで手始めにショックを与えてはどうだろうかと思いついた――なに、別に大したことじゃない。これまでのように明日からもホテルで仕事していいんだから。ぼくは、男たちを整列させてあの子と楽しんでこいといってやったんだ』と」

話し続けるエンツォの唇がゆがんで、悲し気な微笑がほのかに口許に浮かんだ。そしてぼくを見詰めながら静かにいった。「さてここで、人間の心にどんなことが起こるか、よく目を向けてもらいたい。何秒かの間、わしは自分でも何を仕出かすかわからないと思った。しかし、どうしてだろうか？グラチアが拷問されていることはすでに判っていた。棍棒でぶん殴られたり生爪をはがさ

れたりするよりか、五、六人の男にレイプされる方が、可哀そうなグラチアにとってはひどいことだろうか。たぶんそうではあるまい。

「わしが彼女を愛しているから、相像するだけでわしがかっとなってしまったといいなさるかね。そうではない。かっとなったどころではなかったのだ。悪夢でも見ているようにいろんなことが同時に起こった。まるでわし自身がグラチアの肉体のなかに、心臓のなかに入ったかのように、わしは、かの女といっしょに涙を流し、恥ずかしさを覚えているような気がした――しかも同時にかの女をレイプしている男の一人として、自分の姿が目に映ったのだ。

「わしはその気になってもいない女を手ごめにしたことはなかっただろうか――たぶん、直接的に力ずくではなかったとしても、けっきょくは五十歩百歩の手段を弄して？それにグラチアの親父がいなかったら、わしとてあの娘をものにしようとたくらんでいたはずだ。するとその時、わしには自分の正体が――地下室のあの豚どもと寸分違わぬ男の姿がまざまざと見えたのだ！ああ、聖母マリア様に誓ってもいい、その時のわしの心中にどんな考えが渦巻いたか説明するのは、言葉に出していうのはとてもできない――火山が墳火して、腹から一切合財吐きだすようなものといえばよいだろうか。

「だが、その時に思ったことや、感じたことを今でも細かにわしは覚えている。つぎのように独り言をいったのを覚えている。『いいか、この臆病者め。お前は血管に汚水が流れている臭い豚だ。いいものを持っているじゃないか、拳銃を。奴らがグラチアを連れてきたら、ブラントを撃て。それからかの女を。それから自分を撃ち殺すんだ』

エンツォの唇がまたもゆがんで、悲しそうな微笑がかすかに浮かんだ。「いうまでもないことだが」とかれは続けた。「わしは自分を撃たなかった。だれも撃たなかった。しばらくして二人のナチス親衛隊員がグラチアをオフィスへ連れてきた。彼女は歩いていたが呆然自失のようだった。そしてかの女は泣いていた、、、おおっ、、、ほんとうに泣いていたのだ、声こそ高くはなかったが頭のてっぺんからつま先までどこもかしこも泣いていた。奴らはかの女を椅

子に座らせた。かの女は椅子にくずれ落ちたが、まるで子どもが放り投げる縫いぐるみ人形のように座った」

エンツォは言葉を切った。かれは泣いていた。涙がそのいかつい頬を伝って静かに流れ落ちていた。「あの子は黒いスカートとセーターを着ていた、、、スカートのボタンが失くなっていた。足はむきだしだった、、、そして血が流れていた。ブラントはその血を見てさも驚いたように笑った。そして親衛隊員にいった。『イタリア娘がこの年になってまだ処女だなんてことはないだろうな？』と。隊員は二人とも笑った。一人が『われわれも驚きました』といった。ブラントは手を振って、出ていけと合図した。それからわしに向かっていった。『この娘も今度は口をきくだろう。君、始めてくれ、、、』

「どうするかについて、わしの気が変わったのはこの時だった。わしは『はい、署長閣下』というとグラチアのそばへ歩み寄り、上体を起こしてやって壁にもたれかけさせた。『グラチア、エンツォだよ』と何回となく呼びかけた。すすり泣きが次第におさまって、かの女の目にわしの姿が映るようになった。わしはブラントに水をくれと頼んだ。水をもらうとグラスをかの女の口にあてた。そして飲めといった。かの女は一口飲んで、それから喉がからからに渇いていたように急にぜんぶ飲んだ。

「わしは『グラチア、こちらを見るんだ。わしがわかるか？』といった。かの女は顔を向けてわずかにうなずいた。『よく見るんだ！』といって、わしはレボルヴァーを引き抜いた。『これが見えるな？』かの女は再びうなずいた。わしは『気をつけて見ているんだぞ』というや――撃鉄を起こしてブラントに狙いをつけた」

話を中断したエンツォの手の指が膝の上で動いた。「それでな」というエンツォの声は悲しく苦々しかった。「わしは万事うまくやった、、、そのあとの手段にも申し分がないと思った――ある一つのことを除いてだがな。わしはブラントにいった。『いつでも撃つからな。こちらが何もいわないのに少しでも動いたりすれば、一巻の終わりだぞ。そっちへ行くんだ』わしはドアが開いて

だれからも見られないように、かれをドアの片側に追いやって――壁に向かって立たせ、両手を壁につかせた。かれの身体を探ってルーガーとベルトにさしたナイフを抜きとった。

「それからブラントとドアに注意しながら、グラチアの方も見えるように後ろに退った。かの女は硬くなって上体を起こしていた。わしはいった。『いいか、グラチア。ここから連れ出してやるからな。わしのいうこと、わかるか？返事をするんだ！』

『わかるわ、エンツォ』とかの女はいった。口を開くのもやっとだった。

『よくわかったわ、エンツォ』

『歩けるか？立つんだ』

「かの女は立ちあがったが、椅子の背を手でつかまないと立っていられなかった。『目まいがするのか？』とわしは訊いた。

『ええ、少し。でも、歩けるわ。エンツォ、おお、エンツォ。お願い、あたいをここから出して。もしだめなら、あたいを撃って。お願い。きっと撃つって約束して。聖母マリア様に誓って』

『うん、約束する。だが、今はおとなしくしてるんだ』とわしはいった。かの女をこんな目に会わせたいくじなしのくせして、まるで救いの神ででもあるかのように、かの女から『エンツォ、エンツォ』と呼びかけられるのは、わしには堪えられないほどだった。わしはレインコートを取って拳銃が見えないように腕にかけた。

「それからブラントに近寄ってこういった。『いいか、よく聞け。同じポリ公のよしみで命だけは助けてやる。あんたを殺（や）るいわれはない。わしはパルチザンじゃないからな。だが、この娘は渡せない。あんたさえおとなしくしていれば、三十分で放してやる。どうだ、それで手を打つか？』

『いいとも』とかれはいった。『ぼくをどうするつもりかね？』

「わしは命令した――わしとグラチアの三歩前を歩け。まっすぐ中庭に出て車に乗れ。運転はあんたがしろ。山に入ったら放してやろう。だが、何か変な

ことでもしようものなら土手っ腹にぶちこむぞ、と。

『心配せんでもよろしい。ぼくは馬鹿じゃないからね』とかれはいった。

「そういうわけで、わしは左腕でグラチアを抱きかかえて拳銃を持った右腕を自由にした。オフィスから中庭までは遠くなかった――階段を一つ降りて、戸口を出ればよい。途中で一人の親衛隊員とロビーの警備兵に出会っただけだった。庭には一小隊のゲシュタポがたむろしていたが、ブラントが車を出せと大声でわめくと何も不審がられなかった。わしはグラチアを車の後ろに乗せ、横になるようにいった。

「わしは助手席に乗り、ゆっくり発進させて一ブロック行ったらスピードを上げろとブラントに命じた。十五分で町の外に出た。それから二十分で山のなかに入ったので、かれに車を停めろといった。わしはとても気分がよく、いやに興奮していたので、からかってみたい気持を抑えることができなくなった。わしは口に出した。『正直にいえよ。わしがあんたを撃つと思うかね？』

『われわれは手を打ったんだろ』とかれは答えた。『君がいったように、われわれは警官同志じゃないか。君がぼくを撃つはずはない』

『おっしゃるとおりだ』とわしはいって『だが、グラチアはそうは思わんだろうよ。グラチア、お前は奴を撃ちたいか？』

「かの女はうなずいた、、、そう、祭壇の前に立つ花嫁がイエスと答えるように、彼女はうなずいた、、、わしはポケットからルーガーを取り出し、撃鉄を起こしてかの女に差し出した」

エンツォは、ぼくの顔をじっと見つめて苦笑いを浮かべた。「その時、わしたちはちょうど山のなかに来ていたんだ――ドイツ軍の将校車に乗って山のなかで駐車して――近くにいるパルチザンにとっては絶好のターゲットだった――わしが思いも寄らなかったというのはこのことだ。軽機関銃が車の片側から撃ってきた。もう一方から手留弾が飛んできた。正気に返ると、わしはパルチザンのキャンプにいた。かれらは、みんなすまないといってくれた。だが、車のなかにだれが乗っているかなど、かれらにどうして判っただろうか？わ

しは脚をなくした、、、ブラントは死んだ、、、そして、わしの可愛いグラチアも死んだ」

エンツォはぼくから顔をそむけると、店内の何もない空間の闇をじっと見やった。そしてゆっくりといった。「あんた、これでお終いですよ。これがわしの物語りというわけだ。わしには思えるんだ、、、ずいぶんと考えてきたんだ、、、それを、、、そうだな、虫けらを例にとって見るといいんだが、、、虫けらが持っているものが何であろうと、本能というかな、、、虫けらは虫けらなりに生き方を知っている。だが、わしら人間は、、、わしらはほんとうにいろんな心を持っている、、、そしてその心のためにわしらは、いったいどんなことをやらかすか、えっ？そうは思いなさらんかね？」

訳者あとがき

アルバート・マルツ（1908～85）の短編「お巡り」(“The Cop”) は60年代後半に書きためられていたもので、雑誌などには発表されなかったが、作者にとって２冊めの短編集『ジャングルの午後～アルバート・マルツ短編選集』(*Afternoon in the Jungle: The Selected Short Stories of Albert Maltz*, Liveright, 1970) にはじめて収録された。

本訳の底本には、リヴライト社から1971年に出版されたペーパーバック版を使用した。